

「方法」講義立会記

学籍番号：11AA014T

氏名：水野佑里子

公開について：公開可

「芸術の創造と方法主義宣言」

「方法」とは一体何なのであろうか。その言葉を聞き、なにかをするための手段という捉え方しか持ち合わせていなかった、というのが初めの、私自身の正直な感想である。芸術、その内でも美術表現という分野における固定概念、それを覆すものが、私にとっての「方法」主義であったと言える。

美術という分野において連想するのはやはり、絵の具で描かれた西洋美術など、展覧会でよく目にするものであろう。視覚的に何かを捉え、造形されたものを見て、鑑賞する。教育過程での美術は、ただ単に絵を描く、表現の幅は単一的なものであり、技術的な良し悪しで判断されてしまうことも少なくはない。これが一般的な美術の捉え方であり、また各々が無意識に枠に嵌っている可能性も考えられる。

一方、日常に、転がっている当たり前の物が、時として芸術へのエッセンスになり得るのではないか、という部分に着目し芸術に関して考えを深めていくとする。そこで出会ったのが表象文化、「方法」という新たな芸術の形であり、新たな思想としての芸術理解をする上で、それを深く理解する必要がある。

現時点、「方法絵画、方法詩、方法音楽（方法主義宣言）」という全くもって新しい未知の分野における評価はまだはっきりと定まっていない。宣言の形式において、Eメールという現代的かつ目に触れやすい媒体を使用することで、芸術に触れる機会の少ないものや、また文学的倫理を好とするものにとっても、視野を広げるという点において、非常

に優れた方法だったのではないか、と私は考えたのである。『妃』という冊子には「われわれは論理主義自体がかかえる矛盾を知りつつも、敢えて論理主義を標榜するのだ」という、いちおう(反モダニズムとしての)ポストモダニズムにも配慮したスタイルだったのである。」とか書かれている。一般的に、ポストモダン (Postmodern) という言葉は、「近代の次」という意味を持ち合わせており、通説では、ポストモダンをマルクス主義のような壮大なイデオロギーの体系 (大きな物語) が終わり、近代イデオロギーが瓦解したという意味で使っているという事例も挙げられる。この近代イデオロギーという面において、「方法主義宣言」は最もこれを表しているのではないかと考えたのである。古来から築き上げられた芸術という形を良い意味での「破壊」と「創造」を成し得ていると捉えられる「方法」という論理は、現代のニーズに通ずるものを孕んでいるという点に思考の軸を置けば、また新たな「創造」の種となる。

「方法絵画、方法詩、方法音楽 (方法主義宣言)」について解明できた部分は多いとは言えないが、この「方法主義宣言」の根底には、中ザワヒデキ自身が内に秘めたるものを発信することにおいて非常に長けており、それを提示する為のいかなる手段さえも、最早芸術性を感じ取ることができるのではないだろうか。